ミュスタイア　Mustair

8 月 12 日　スイス 10 日目　観光　晴れ

マルコ･エ･ローザ小屋から下山後、チェルネッツを経由してミュスタイアまで移動した。

エピソード

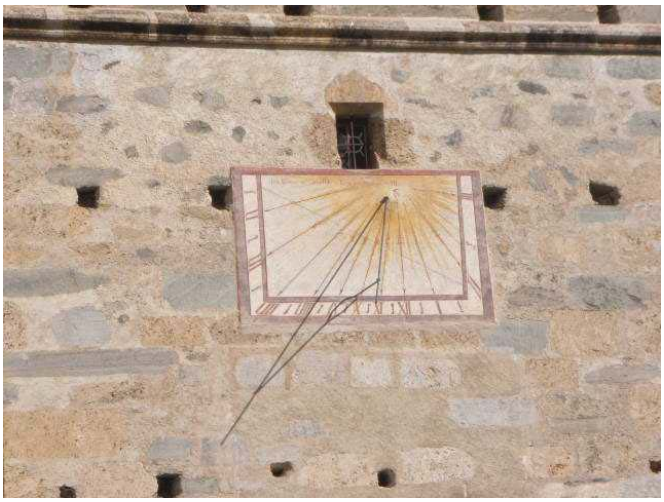
ミュスタイアは人口 700 人のイタリアとの国境にあるスイス一番の秘境の村。聖ヨハネ･バプティスト修道院は 1983 年に世界遺産に登録されている。16 年前にチェルネッツからイタリアのステルビオ峠にポストバスで向かうときにイタリア国境に近い町や村の素朴な姿に感動したが、今回はステルビオへ向かう道と分かれて　ミュスタイアを訪れた。

村に着いてからどこに宿泊するか迷ったが、古い家屋のホテル表示を見て家人に問い合わせた。案内されて対応に出てきたご主人は物腰の丁寧なご老人、建物の様子や部屋のつくり、広いバルコニー、バスルーム、調度品、部屋の鍵のかけ方などを紹介した上で、3 人部屋で 2 人朝食込みで 137 ユーロ（日本円で 13700 円）の宿泊料金を示してくれた。このホテルは歴史ある宿をホテルに改装したもので、年季の入った調度品や建物のつくりに感銘を受け、すぐに宿泊を決めた。夕食も一緒に頼むことにした。1 人 30 ユーロの夕食はスイス料理のフルコース。ローソクの灯りのもとでおいしく頂くことができた。宿泊客は少なかったが、外食で訪れる人たちが数名加わっていた。翌日、ホテルを出るとき、ご主人はバルコニーから手を振ってお別れの挨拶を送ってくれた。

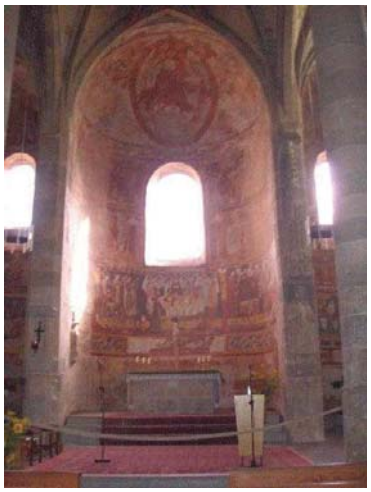
帰国してから調べると、このホテルは 700 年以上の歴史をもつ古代建築の宿であった。ネット上のホテル案内にはオーストリアとスイスの戦いである“Swabian 戦争”の時代のことや建物の歴史などが紹介されていた。1879 年に一旦、宿としての伝統は失われたが、Only 家のカールとアイダが最初の目的によって管理することなり、1958 年に Chasa Chalavaina を買いとって再開した。1965 年に Grisons のカントンとスイス政府からの援助によって素晴らしい建物に復旧している。カールの死後、1975 年から彼の妻と息子ジョンが Chasa Chalavaina ホテルを経営している。再建 50 周年を記念して、ユニークなホテルとして“特別賞 2007”を受賞している。ということは、私たちの対応（部屋の紹介から給仕、見送りまで）をしてくれたのは息子ジョンであった。

翌日の午前中は聖ヨハネ･バプティスト修道院を時間をかけてゆっくりと見学した。修道院の一部が博物館になっていた。他の見学者と一緒に受けた説明はドイツ語でよくわからなかったが、ニュアンスと展示物で少しは理解できた。1100 年以上も前のフレスコ画が残っており、当時の修道女（シスター）の生活の様子や現在のシスターの活動の様子が紹介されていた。この時代のことを知っておればもっと理解は深まったことであろう。納得できる素朴な感動を受けた世界遺産にふさわしい修道院であった。

聖ヨハネ･バプティスト修道院



聖ヨハネ･バプティスト修道院の壁面の日時計



内部のフレスコ画

ドロミテに残る軍事要塞

8 月 14 日　ドロミテ２日目　ハイキング　移動日　晴れ

ウ”ィーゴ･デ･ファッサ～マルモナータ山(ロープウェイ)～ファルツァレーゴ峠～
ラガツォイ小屋からイタリア軍の要塞を経由して下山～コルチナ･ダンベッツォ

エピソード

ファルツァレーゴ峠からでロープウェイでラガツォイ小屋まで上がる。今夜はラガツォイ小屋に泊まる予定であったが満室で断られたため、歩いて下山することになった。

第一次大戦中イタリアは侵攻したドロミテ山群に多くの塹壕を掘って要塞を造りトンネルで結んでいた。このトンネルの探索とハイキングが目的でラガツォイ小屋まで上がったが、トンネルが下山道になっていることを知らずに荷物を置いて入坑したため、途中で気付いて荷物を取りに戻る羽目になった。トンネルの途中には大砲や銃を撃つための窓が開いた要塞があった。トンネルは物資と人の輸送路としてつくられたものである。このトンネルが今は下山用のハイキング道として整備されていた。このような要塞はドロミテのあちこちにあり、トンネルやハシゴ、ワイヤーで結ばれている。この戦争の名残をイタリア山岳会が補修し、新たなコースを追加して登山に利用できるように整備したのが、イタリアのヴィア・フェラータ（VIA ferrata）の始まりである。

入り口

ライト、ヘルメット必携

見物用に銃が展示されている

岩に掘られた洞窟の中